

# 直視下胃生検像による胃潰瘍周囲粘膜内肥胖細胞の検討

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 八子 英器   |
| 号   | 506   |
| 発行年 | 1968  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/18475">http://hdl.handle.net/10097/18475</a> |

氏 名 ( 本 籍 )                      や                      と                      ひて                      き  
八                      子                      英                      器

学 位 の 種 類                      医                      学                      博                      士

学 位 記 番 号                      医                      博                      第                      5                      0                      6                      号

学位授与年月日                      昭 和                      4                      3                      年                      3                      月                      2                      6                      日

学位授与の要件                      学位規則第 5 条第 1 項該当

研究科専門課程                      東北大学大学院医学研究科  
( 博士課程 ) 内科学専攻

学 位 論 文 題 目                      直視下胃生検像による胃潰瘍周囲粘膜内肥胖  
細胞の検討

( 主   査 )

論 文 審 査 委 員   教授   山   形   敏   一   教授   諏   訪   紀   夫

教授   笹   野   伸   昭

# 論文内容要旨

## I 目的

肥満細胞 (mast cell: 以下mcと略記する) については、1877年 Ehrlich によつてはじめて記載されて以来、多くの報告がみられている。しかるに胃粘膜内mc についての最初の記載は1948年であり、その後の報告も少ない。胃粘膜内mc と酸分泌との関係が注目され各種胃疾患における胃粘膜内mc の分布状態について興味をもたれるようになったのは最近のことである。したがつて、胃炎との関係についても、正常、表層性胃炎および萎縮性胃炎の場合の胃粘膜内mc の分布密度の関係については、一定の結果が得られていない。さきに教室の狩野は胃潰瘍周囲粘膜の組織学的変化を直視下胃生検像によつて部位別に検討した結果、萎縮性変化は同一胃においては潰瘍辺縁部で最も高度で、病巣より遠ざかるにつれて漸次軽度となり、一方胃粘膜内円形細胞浸潤の程度は、病巣からある距離に至るまでは潰瘍辺縁部から遠ざかるにつれて漸次強くなることを報告している。そこで、私は、同一胃粘膜でありながら部位によつて種々の程度の組織学的変化を呈する胃潰瘍病巣周囲粘膜から直視下胃生検を行ない、その組織材料について、(1) 胃潰瘍病巣からの距離別にみた胃潰瘍周囲粘膜内mc の分布状態、(2) 同一胃潰瘍例の経過追求による胃粘膜内mc の増減傾向、(3) 胃粘膜萎縮性変化の程度とmc との関係、(4) 胃粘膜内細胞浸潤の程度とmc との関係、(5) 胃粘膜内腺管に対するmc の相対的位置とその形態的特長、および顆粒の多寡あるいは染色性との関係、(6) 対照部より採取した生検組織片中のmc の分布密度と、その患者の性、年齢、胃酸酸度との関係、をしらべ、これらの結果から胃粘膜内mc と胃炎との関係について検討を行なつた。また生検材料による検討内容が、従来の切除胃組織材料による検討内容と相違するかどうかをみるため、切除胃粘膜内mc についても同時に検討し、生検材料による結果と対比を行なつた。

## II 対象および方法

対象胃粘膜を胃底腺領域粘膜に限定するため、胃潰瘍あるいは潰瘍瘢痕を有する患者47例をえらび、計54個の潰瘍を対象とした。胃潰瘍粘膜より直視下胃生検を行なう部位を、(1) 瘢痕の中心部、(2) 潰瘍の辺縁部 (内視鏡的に潰瘍周辺に瘢痕性変化がみられるものでは、その瘢痕領域内)、(3) 潰瘍周辺部 (上記辺縁部よりも外側域)、(4) 遠隔部 (周辺部よりさらに外側域であり、潰瘍病変の影響が及んでいると考えられる最も外側域)、(5) 対照部 (潰瘍から全く隔つた領域) の5領域と定め、採取組織片は、生検後直ちに4%塩基性酢酸鉛と10%ホルマリンの混合液に入れて24時間固定し、パラフィン包埋後、5 $\mu$ の連続切片標本とした。染色は、mc 検討にはpH4.0に調整した0.05%トルイジン青染色、又、組織学的検討には、連続切片の

一部にヘマトキシリン・エオジン重染色を行なった。mc の検討は、粘膜固有層内のもののみを対象とし、潰瘍周囲粘膜内 mc の分布状態の比較検討は、400 倍検鏡視野中に認められる mc の数の平均をとって行なった。

### III 成 績

(1) 胃潰瘍周囲粘膜内 mc の分布状態は、潰瘍では病巣から遠ざかるに従って多くなる傾向がみられたが、瘢痕化した病巣の周囲粘膜では、病巣からの遠近による増減傾向は明らかでなかった。(2) 臨床経過につれて直視下胃生検を行ない得た 20 症例のうち、18 例の対照部粘膜内 mc の数は、経過によつて明らかに増加の傾向を示した。この傾向は大きな潰瘍が治癒化し、瘢痕化した群において、ことに著明であつた。(3) 生検組織像で萎縮性変化が強い粘膜ほど mc の数は少ない傾向がみられた。(4) 胃粘膜内円形細胞浸潤の程度が強い粘膜ほど mc の数は多い傾向がみられ、細胞浸潤高度の粘膜では、mc の数は正常粘膜の約 3 倍の数を示した。ことに円形細胞浸潤の他に好中球あるいは好酸球の浸潤を伴う胃粘膜内 mc の数には著しい増加傾向がみられた。(5) 胃粘膜固有層内の mc の胞形を、a) 円または楕円形で突起のない型、b) 円または楕円形で突起を有する型、c) 長い不規則形で突起を有する型、d) 胞形が崩れているもの、の 4 型に分け、胃粘膜内腺管に対する mc の相対的位置をみると、a 型は全型中最も数が多く、その大部分は腺管と関係ない、離れた位置に存在し、又粘膜の萎縮の有無とも無関係には一定の数を保って存在するのに対し、c 型は腺管に近く密接して存在し、高度の萎縮性胃粘膜内では非萎縮性胃粘膜内における c 型の数の  $1/2$  迄減少する傾向がみられた。胞体内顆粒数は、萎縮の程度あるいは胞形に関係なく全体的に少ないが、胞形を更に突起の長短によつて分けてみると、c 型の中に突起の長いものは、他の mc に比べて明らかに顆粒数が多い傾向がみられた。メタクロマジー顆粒の色調についてみると、赤紫色を呈するものが萎縮の有無に関係なく大半を占めているが、紫色を呈するものは非萎縮性胃粘膜に多い傾向がみられた。顆粒の濃染性の強い mc も非萎縮性胃粘膜に圧倒的に多い傾向がみられた。(6) 対照領域の胃粘膜内 mc の分布密度は、性別では女にやや多かつたが、年令的に著差はみられなかつた。胃液酸度との関係では、酸分泌の高いものに、mc の多い傾向がみられた。

### IV 結 論

1) 胃粘膜内 mc は、胃粘膜の萎縮と共に減少傾向を示し、細胞浸潤が高度の場合には、増加傾向を示すが、大多数の mc は、胃炎とは関係なく存在している。2) 萎縮性胃粘膜で減少する mc は、長い不規則形を呈し、長い突起を有し、多くは青紫色に濃染した多数の顆粒を有し、腺管に密接して存在している。

## 審 査 結 果 の 要 旨

著者は、同一胃粘膜でありながら部位によつて種々の程度の組織学的変化を呈する胃潰瘍病巣周囲粘膜から直視下胃生検を行ない、その組織材料について、(1)胃潰瘍病巣からの距離別にみた胃潰瘍周囲粘膜内肥胖細胞の分布状態、(2)同一胃潰瘍例の経過追求による胃粘膜内肥胖細胞の増減傾向、(3)胃粘膜萎縮性変化の程度と肥胖細胞との関係、(4)胃粘膜内細胞浸潤の程度と肥胖細胞との関係、(5)胃粘膜内腺管に対する肥胖細胞の相対的位置とその形態的特長および顆粒の多寡あるいは染色性との関係、(6)対照部より採取した生検組織片中の肥胖細胞の分布密度と、その患者の性、年齢、胃液酸度との関係をしらべ、次の成績を得た。(1)胃粘膜内肥胖細胞は、胃粘膜の萎縮と共に減少傾向を示し、細胞浸潤高度の場合には、増加傾向を示す。しかし大多数の肥胖細胞は胃炎とは関係なく存在している。(2)萎縮性胃粘膜で減少する肥胖細胞は、長い不規則形を呈し、長い突起を有し、多くは青紫色に濃染した多数の顆粒を有し、腺管に密接して存在している。

依つて学位を授与するに値するものと認める。